

企画展

編む・組む・削る

—植物利用の技術史—

会 期：平成29年6月24日（土）～8月27日（日）

会 場：福島県文化財センター白河館特別展示室

展示の開催にあたって

私たちの暮らしには、植物を利用した様々な製品が根付いてきました。これらを作る技術の中には、縄文時代から現代に至るまで、脈々と受け継がれてきたものが存在します。

しかし、近年においては、高度経済成長後の生活の変化や作り手の高齢化、後継者不足などの様々な要因により、伝統的な技

術が途絶え始めています。

今回の展示では、ふくしまの豊かな森林資源を利用した加工技術に焦点をあて、ふくしまの自然と伝統文化を見つめ直します。そして、「民俗技術」という無形の文化財を後世に伝えていくため、まほろんが取り組んでいる製作実験の成果を紹介します。

1. 編み組製品のルーツ

樹皮や草など編んで製作する編み組製品は、材料の採取が容易であるため、人類が植物を利用し始めた初期の段階から存在していたと考えられています。現在、日本に残る最古の例は、鹿児島県三角山Ⅰ遺跡（約 13,000 年前）の土器に付着した圧痕資料で、実物の製品としては、佐賀県 東 名 遺跡から出土した縄文時代早期末（約 7,000 年前）のかごがあります。福島県内では、三島町荒屋敷遺跡や南相馬市中才遺跡で縄文時代、玉川村江平遺跡で中世以前のかごが、須賀川市稲村御所館跡からは、中世の箕が出土しています。

遺跡からの出土品や絵画・民俗資料と現代の編み組製品を比較すると、その基本的な編み方は縄文時代から現代まで、あまり違いがないことがわかります。



中世の箕（福富草紙）
写真提供：白百合女子大学図書館



現代の箕 シノダケ+ビニール製
所蔵：いわき市暮らしの伝承郷



縄文時代のかご（荒屋敷遺跡出土）
写真提供：三島町教育委員会



中世以前のかご（江平遺跡出土）

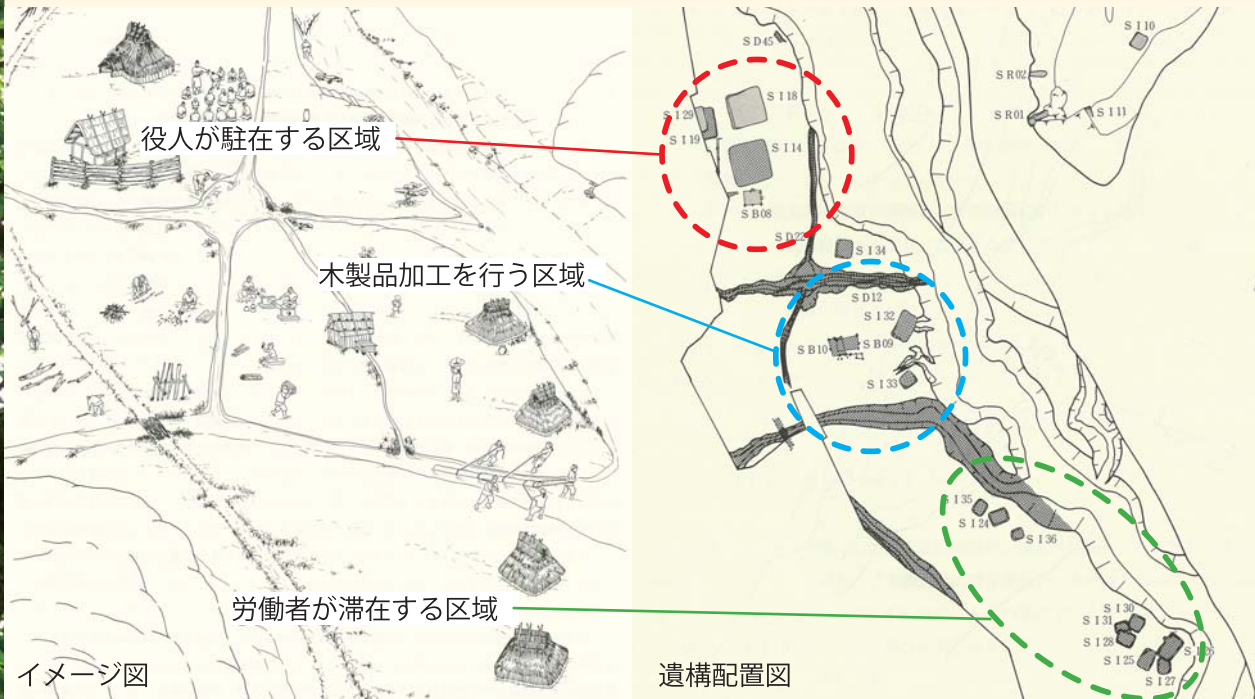


現代のかご ヤマウルシ製
所蔵：只見町ブナセンター

5. 木製品生産の場（大猿田遺跡の例から）

いわき市四倉町の大猿田遺跡の発掘調査では、奈良時代の木製品だけでなく、加工した際の本くずや加工前の伐採本などが大量に出土し、遺跡が木製品の加工場であったことがわかりました。遺構や出土遺物の分析から、大猿田遺跡の木製品加工場では、加工内容により作業場が区分されてい

たことや、作業の監督者の駐在区域と労働者の滞在区域が分かれていたことなどが判明しています。また、当時の木の実や種のほか、植物の花粉も検出され、木製品とその材料となった木の種類との整合性が確かめられるとともに、木製品生産に伴う植生の変化も明らかになりました。



イメージ図

遺構配置図



木製品出土状況



挽物加工後の素材

企画展

編む・組む・削る

—植物利用の技術史—

発行日／平成29年6月24日（土）

編集・発行／公益財団法人福島県文化振興財団

福島県文化財センター白河館（愛称「まほろん」）

〒961-0835 福島県白河市白坂一里段 86

TEL: 0248-21-0700 FAX: 0248-21-1075

ホームページ：[まほろん](#) [検索](#)

企画展の開催にあたり、次の機関からご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。（順不同）
只見町ブナセンター・三島町生活工芸館・三島町教育委員会・いわき市暮らしの伝承郷・いわき市教育委員会・南相馬市教育委員会・須賀川市・郡山市教育委員会・南会津町教育委員会・新潟県教育委員会・埼玉県毛呂山町歴史民俗資料館・富山県小矢部市教育委員会・奈良県田原本町教育委員会・鳥取県埋蔵文化財センター・佐賀市教育委員会・白百合女子大学図書館

2. 編み組の技術

材料の採取・加工

現代の編み組製品は、「材料の採取・加工」、「仕立て」、「仕上げ」の工程を経てつくられます。これらの工程の内、作業量の7割を占めるのが、「材料の採取・加工」工程であることから、編み組細工においては、材料の採取・加工の知識と技術が製品の良し悪しを決定づけることになります。材料の採取では、材料となる植物の特性により、「採取時期」や「生育年数」を選ぶ必要があります。また、製品にあった素材を有効に活用するため、様々な採取方法が確立されてきました。樹皮を例にとると、右の写真のような「縦剥ぎ」・「横剥ぎ」・「螺旋剥ぎ」・「抜き取り」等の素材採取方法^(※)があり、用途に合わせて選択されてきました。

※名久井文明「縄紋時代起源の造形技術」『樹と竹』福島県立博物館 2007 年による。



縦剥ぎ



横剥ぎ



螺旋剥ぎ



抜き取り

素材の硬さによる技法の違い

ワラなどの柔らかい素材では、芯材にヨコ材を巻きながら固定する「もじり編み」や「巻き編み」が多く使用されます。一方、竹や樹皮などの硬めの素材では、同質の素材を交差させ、互いに固定する「網代編み」・「ござ目編み」・「四つ目編み」・「六つ目編み」などが用いられます。



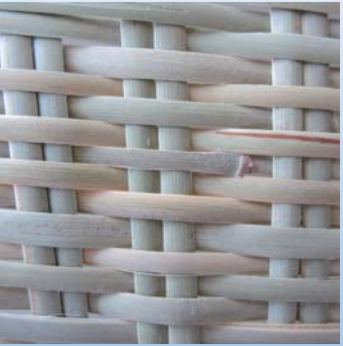
もじり編み



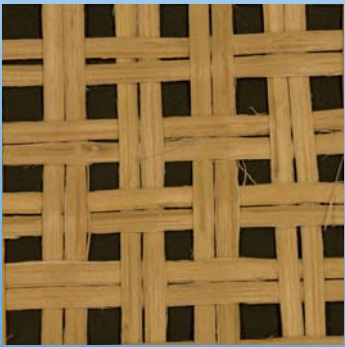
巻き編み



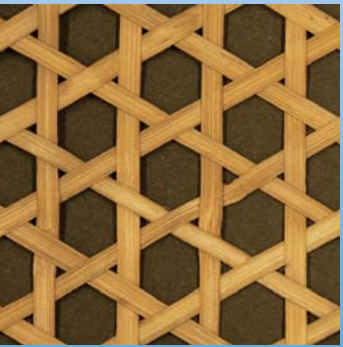
網代編み



ござ目編み



四つ目編み



六つ目編み

3. 土器に残った痕跡

土器の底部には、土器を製作する時に下に敷かれた編み組製品の痕跡^{こんせき}が残されている場合があります。このような痕跡から、その当時の編み組技術を知ることができます。



縄文時代前期（仲ノ縄B遺跡）



縄文時代中期（上ノ台A遺跡）



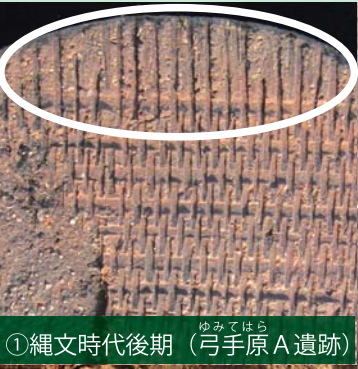
縄文時代後期（荒小路遺跡）

編物の痕跡から読み取れる情報

ここでは、編物の痕跡からどのような事がわかるのかを見ていきます。

左写真の①では、編み組が未完の状態となっている端部が片側に確認されるので、土器の底部の大きさ程に編んだ敷物が使用されていた可能性があります。また、②は、編み方が異なる2種類のものを使用しているので、敷物またはかごなどの破片を合わせて使用したものと考えられます。

この他、③・④では、痕跡の凹凸から編み組製品の厚さや素材の厚さまでも確認できます。さらに、痕跡内に見られる素材の繊維痕及び筋状の痕跡から、素材の樹種やその状態なども推測することができます。このような痕跡を詳細に観察することにより、過去の編み組技術を読み解くヒントが得られます。



①縄文時代後期（弓手原A遺跡）



②縄文時代前期（小池田遺跡）



③縄文時代前期（荻平遺跡）



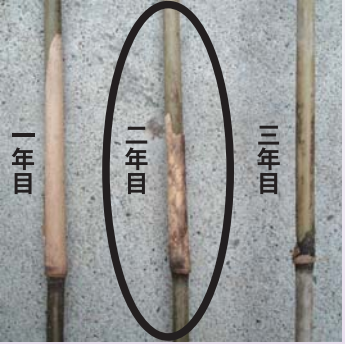
④縄文時代前期（荻平遺跡）

4. 映像記録に基づく箕づくり再現－存続が危ぶまれる技術－

「箕」は、主に穀物を選別することに使われ、弥生時代から現在までの約 2,000 年も受け継がれてきた農具です。しかし、福島県内では、藤と篠竹^{しのだけ}などを主材料とする現役の箕の作り手は、現在ごく数人となっています。作り手の方々は、高齢で、後継者がいないという悩みを抱えてきました。

このような悩みは、箕の作り手に限られるわけではなく、桶作りや野鍛冶^{の か じ}などでも同様です。こうした無形の「民俗技術」の衰退は、平成 23 年 3 月に起こった東日本大震災と原子力災害により、一気に加速してしまいました。

このような状況の中、まほろんでは、無形の文化財を保全する活動の一環として、伝統的な技術や、それに関わる道具などの映像記録に基づき、将来的に復元が可能となるよう、製作実験に取り組んでいます。



竹の採取時期（二年目を使用）



ヒゴ取り（抱き剥ぎ）



藤皮を打ち込む



立ち上げ



完成した一斗箕